

九州支部

国吉真行, 石川清司

症例は73才, 女性. 検診で左上肺野の腫瘍陰影を指摘される. 胸部CTで左上葉に径2.2 cmのスリガラス状陰影を伴う腫瘍陰影を, 下葉に径1.5 cm大の二個の腫瘍陰影を認めた. 経気管支肺生検により左上葉の腫瘍は肺腺癌と診断したが, 左下葉の腫瘍の確診は得られず, 胸腔鏡下に左肺下葉部分切除術を施行した. 迅速組織検査で肉芽腫と診断し, 肺内転移は否定され, 続けて左肺上大区域切除, 縦隔リンパ節郭清を行った. 病理組織の結果, 左肺下葉の腫瘍は肺クリプトコッカス, 左肺上葉の腫瘍は中分化型腺癌, pT1N0M0, Satage IAと診断された.

19. 抗酸菌症を併存した肺癌切除症例

長崎大学医学部第1外科

赤嶺晋治, 村岡昌司, 永安 武

岡 忠之, 綾部公懿

同 医療技術短期大学部 田川 泰

同 病理部 林徳真吉

【目的】肺結核や非定型抗酸菌症は依然として日常遭遇する疾患であり, 肺癌の併存も稀ながら経験される. 今回2例の併存症例を経験したので, 問題点を検討する. 【症例1】62歳女性, 定期健診にて左下葉の胸部異常陰影を指摘され, 喀痰より扁平上皮癌が検出された. 入院時咳嗽喀痰と少量の血痰及び結核の既往歴があった. 入院時喀痰の抗酸菌検査を行うも結果を待たずに左下葉切除術を施行. 術翌日にヒト型結核菌と報告された. 【症例2】68歳女性, 1998年6月健診にて胸部異常陰影を指摘され, 気管支肺胞洗浄液から非定型抗酸菌が検出された. 種々の抗結核薬を投与されるも陰影増大のため精査を行い, 2001年2月肺癌と診断され切除を行った. pm1であった. 【結語】肺癌と肺結核の併存を常に考慮した喀痰検査の必要性和抗結核薬に抵抗する陰影に対し, 常に癌の可能性を年頭にいれる必要性が示唆された.

20. 肺腺癌における発育・線維化形式と予後に関する病理学的研究

九州大学大学院医学研究院病理病態学

松尾芳雄, 古賀孝臣

米満吉和, 居石克夫

同 消化器総合外科

吉野一郎, 杉町圭蔵

同 臨床放射線科 増田康治

【目的】肺腺癌病巣内に見られる多様な発育・線維化形式による浸潤能の違いと予後への影響を基底膜の状態の観点から検討. 【方法】九大病院にて切除された原発性肺腺癌73例を3型の発育形式(①表層置換 ②乳頭/管状 ③充実)と2型の線維化形式(i. 虚脱線維化 ii. 線維増生)により領域別に分類した. 基底膜抗原(ラミニン, IV型コラーゲン)と, MMP-2, -9, -14, TIMP-2の発現を免疫組織化学的に検討し, 発育・線維化形式と予後の相関を検討. 【結果と考察】発育線維化形式は基底膜抗原と, 基底膜抗原はMMP-2, -14と負の, TIMP-2と正の相関を認めた. 線維増生型を伴う症例と伴わない症例の間で予後に有意差を認めた. 発育形式により, 浸潤能に違いがある事が示唆された. 基底膜の破壊にはMMP-2, MT1-MMP, TIMP-2の発現が関与していると思われた. 線維増生巣の存在は予後不良の因子となると考えられた.

21. 1年前の検診フィルムに異常陰影が存在していた原発性肺癌患者の予後

球磨郡公立多良木病院呼吸器科

柏原光介, 大田高祐

目的: 検診における1年間の発見遅延が原発性肺癌患者の予後に影響を与えるか検討した. 対象: 平成7年~12年の間に肺癌・結核検診で発見された無症候性肺癌患者でかつ1年前の検診フィルムが存在した99例. 結果・考察: 前フィルムとの比較で異常陰影が指摘された57例(58%)中, 1年前に指摘された異常を放置した23例を除く34例(34%)で前フィルムの異常陰影を発見できなかった. その段階での腫瘍径別(10 mm未満, 10~20 mm, 21 mm以上)に3年生存率を検討したところ腫瘍径が大きい程予後不良であることが示唆された(86% vs 60% vs 10%, $p<0.0001$). 10 mm未満の腫瘍は肺野の淡い斑状陰影であり事前に腫瘍の存在を知らなければ確認しにくいものが多かった. また20 mmを越える腫

瘍は心臓・横隔膜および鎖骨胸骨端と重なる陰影が大半を占め, 胸郭構成物と重なる腫瘍陰影を早期発見することが予後の改善に寄与すると考えられた.

22. 原発性非小細胞肺癌患者のHLA typeと予後について

産業医大医学部第2外科

宗 知子, 竹之山光広, 菅谷将一

安田 学, 山下智弘, 多賀 聡

小山倫浩, 大崎敏弘, 安元公正

【目的と対象】HLAは抗原認識に不可欠な分子であるが, いくつかのHLA typeと癌患者の予後との相関が報告されている. 今回, 原発性非小細胞肺癌296切除症例について, HLA-A, B, C locusのhaplotypeの分布および術後無病生存期間との関係について検討した. 【結果】(1)肺癌患者におけるHLA typeの分布は健常人と比較してB7, B46, B62, Cw4で高頻度, A30, B13, B51, B58, Cw1で低頻度であった. (2)全症例では各HLA typeにおける術後無病生存率に差は認められなかった. (3)病期I期例では術後無病生存率はA2陽性で有意に不良であった. 【結語】病期I期HLA-A2 haplotype肺癌症例の予後は不良であり, 術後早期より慎重な経過観察が必要と考えられた.

23. 癌性心外膜炎の予後因子の検討

熊本地域医療センター呼吸器科

瀬戸貴司, 千場 博

同 循環器科 本多 剛, 大串正道

癌性心外膜炎の多くは癌の終末期に見られ, 致命的な因子の一つでoncologic emergencyである. 今回, 癌に合併した心嚢液貯留のうち癌性心外膜炎と診断された症例の予後因子を検討した. 1992年から2001年までの期間に, 心嚢液貯留を来し, 癌を有した症例は57例であった. 癌種の内訳は, 肺癌37例(小細胞癌4例, 非小細胞癌33例), 乳癌5例, 胃癌5例, 胸腺腫2例等であった. 9例は抗生物質や利尿剤, ホルモン剤の投与で心嚢液は消失した. 心嚢液ドレナージを行った症例25例のうち21例は細胞診にて癌性心外膜炎と診断された. 今回の検討では一般的な予後因子とされている性別, 年齢,